

日韓市民ネットワーク・なごや

한일 시민 네트워크·나고야

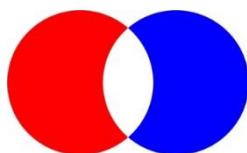
Home Page : <http://www.nikkannet.jp/>

会報 No. 65

2013-5-18

発行者：後藤和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷238
TEL/FAX 0587-56-6788

朱色



目次

- P 1 事務局通信
P 2 会の活動報告とお知らせ
P 7 金沢・能登紀行 感想文
P 9 金沢・能登紀行 俳句
P 14 会員の広場
P 16 編集後記

統括幹事：後藤和晃
事務局
会員 5名
会員 3名
会員 2名
事務局有志

事務局通信

사무국 통신

事務局統括幹事

後藤和晃

感謝、感謝 そしてお願い

～創立16年目の初夏に～

2月9日（土）、名古屋駅前のイタリア料理店で会の15周年を記念する交流会を開きました。会場には顧問、会員をはじめ、協力者、韓国総領事館員、留学生、そしてグループ「ハムケ」の中高生たちなど、実際に75人の皆さんがあつまっていました。島根県からは国際交流員として働いている鄭世桓さん（元・名古屋市国際センター民間大使）が、また京都からは金岡えつ子さんが参加されるなど、県外からの参加者も多く、会の15周年を盛大に祝うことができました。イタリア料理店ゼンゼロの料理、ワインの味も申し分なく記憶に残るすばらしい交流会になりました。ご参加いただいた皆さん方に心からの御礼を申し上げます。

この交流会や3月20日開催の第16回総会に参加できなかった方々には、この紙面を借りて15年間のご支援に対する御礼と、これから当会の方針について、お伝えしたいと思います。皆さんの手元にも伊藤みつ子さんにまとめてもらった「15年間の歩み」と銘うったパンフレットが届いていると思います。パンフを見て私たち事務局一同も「よくぞ、これだけの行事を小さな団体でこなして来たもんだね！」と改めて驚きました。まさに会員の皆さんへの支援と協力なくしては、数多い交流行事をこなし、会の歴史を積み重ねて来ることは、できなかつたでしょう。

改めて思い返しています。韓国の大学生交流団と共に古代朝鮮の文化が残る奈良市に旅行した若者たち、その交流団のメンバーをホームスティさせて頂いた皆さん、また名古屋に留学中の韓国の大学生たちと大自然の中で、共に歩き、歌って頂いた方々、こうした



歴代の民間大使を迎えた15周年記念交流会

皆さん方の善意と努力なくしては、日韓市民ネットが15年もの間、活動を続けられることは、ありえなかつたでしょう！

「本当に本当に、有難うございました！」とひたすら感謝する次第です。

心からの感謝を申し上げる一方で、会員の皆さんのご理解、ご了解を得たい事があります。それは会創立から15年も経過した今、私たち事務局メンバーも構成員にも高齢化の傾向が著しいという現実を踏まえつつも、会を当分、存続させることを許して頂きたいという点です。その背景には会の発足から7~8年間は日韓の間の雪融けが大いに進んでいたのに反し、ここ4~5年間は両国の間にかつてない程の、強いすきま風が吹き荒れているという現実があります。

このように北風が吹きまくっている時期に、小さな団体とはいって、私たちのような市民レベルの日韓交流を果たしてきたグループが姿を消してしまうのは、極力避けたいと考えるのですが、如何でしょうか？

もちろん 15 年もの歴史を重ねた会を継続させるには多くの問題があります。まず会の活動を中心的に支えてきた人たち、特に先の敗戦で朝鮮半島から引き揚げてきた方々が、この所相次いで亡くなっています。大田から引き揚げてきた大久保舜司さんと野村博司さんの兄弟、光州からの引揚者で韓国の時調の研究で有名だった瀬尾文子さん、そして大邱から帰国した水崎久弘さん、弘三さん、五美さん三兄弟など、交流に大きな役割を果たしていた人たちの逝去が相次いでいるのです。こうした中心的メンバーのご逝去は、会の組織力、財政力に響いてくるのは当然のことでしょう。「もう 15 年も頑張ったから、そろそろ活動にケリをつけてもいいのでは…」という声もないではありません。

しかし状況の悪化は認めつつも、私たち事務局としては「これからは会の力が許す範囲でやれることをや

って行く」という形で、たとえどんなにささやかなレベルであっても学生・市民との交流を続けたいと考えています。

率直に言えば、韓国からの学生交流団に奈良 1 泊旅行を必ずプレゼントした、これまでのやり方は、財政的侧面とボランティア運転手の高齢化という 2 つの理由で、今後は無理となるでしょう。奈良旅行のプレゼントのない名古屋でのホームステイに、韓国的学生がどこまで関心を持ってくれるか分かりませんが、例え 4~5 人のグループであっても歓迎しようと考えています。

私たちは、会の発足いらい永い間、日韓交流史を深く学んできました。その結果、私たちは、日本人と韓国人は、ほとんど同じ DNA を共有しながらも、際立って個性的で特色ある、それぞれの文化を生かしつつ、互いに高めあうことができる間柄だと確信しています。

日韓両国人が真に理解しあえる日が来ることを信じつつ、会の活動を地道に続けて行きたいと思います。よろしくお願いします。



会の活動報告とお知らせ

모임의 활동 보고와 통지

1. 15 周年記念交流会 会計報告

2 月 9 日(土)

於 ゼンゼロ

1 収支報告

残高 ￥77,000

収入	会費	202,000	支出	ゼンゼロ	220,000	差引残高	ネット会計へ繰入
	5000 * 40						
	2000 * 1						
寄付金	95,000						
計	297,000			計	220,000		計 77,000

2 寄付・寄贈品 内訳

計 ￥95,000

顧問	鄭煥麒	鍾路・福餅	会員	大久保孝造	5,000	関係者	間宮和之	2,000
	石原俊洋	10,000		岡崎洋子	1,000		倉知義泰	2,000
協力者	尹大辰	10,000		後藤和晃	10,000		松田哲育	2,000
	金龍鐘	5,000		土岐良文	3,000		倉知實	2,000
	鄭禧昇	30,000		長澤進	5,000		倉知通夫	2,000
	星原幸次郎	2,000		匿名希望	2,000		坂本孝義	2,000

3 夏・交流会への事前寄付

匿名希望 ￥100,000

2. 第 16 回 総会

3 月 20 日(水・祝) 於 名古屋国際センター

3 月 20 日、名古屋国際センター会議室において第 16 回総会(30 名出席)を開きました。例年通り、前年度の実績や会計の報告を行ったあと、今年度の事務局態勢や行動計画などが拍手で承認されました。各項目は以下の通りですので、目を通しておいて下さい。

なお、今年度の行事計画の発表に際し、統括幹事より、今会報の冒頭に掲げた事務局通信と同様の見解が公表されたことも申し添えます。

“日韓市民ネットワーク・なごや” 2012年度 実施行事

月	日	曜日	行 事	備 考
4	15	日	日韓交流史講座V 高句麗・渤海シリーズー6 地理で見る高句麗・渤海	金沢学院大教授 小嶋 芳孝 氏
	16～18	月～水	水崎林太郎翁追慕祭に参加 ～ 韓国・大邱市寿池～	事務局 後藤・鈴木
5	2	水	会報60号発行	事務局など
	3～5	木～土	グループ“ハムケ” 日韓の高校生交流	グループ“ハムケ” 久田 光政 幹事
6	5/27～6/3	日～日	日韓交流史講座V 高句麗・渤海シリーズー 高句麗・旧満州紀行 ～ 大連・瀋陽・集安・長春・延吉～	九州歴史資料館館長 西谷 正 氏 日比谷高校教諭 武井 一 氏
7	3	火	会報61号発行	事務局など
8	2～6	木～月	光州学生訪問団受け入れ 奈良旅行8/2～8/3 ホームステイ8/3～6 交流の夕べ 8/5 (日)	会員・協力者
9	15	土	会報62号発行	事務局など
10	20	土	留学生・人道の丘ハイク・岐阜県八百津町 ～ 命のビザの杉原千畝との出会い～	留学生・有志
11	7	水	韓日歴史・文化フォーラム30回記念として 映画「白磁の人」上映 民団会館	事務局・会員
12	17	月	会報63号発行	事務局など
2013年				
1	5	土	話してみよう韓国語第3大会 ～於：名古屋国際センター～	実行委員会に参加 久田・後藤他
2	9	土	日韓市民ネットワーク・なごや15周年交流会	会場・琥珀会館
	9	土	会報64号発行	事務局など
3	20	水	第16回総会	国際センター会議室

2012年度 会計報告書

2012年4月1日～2013年3月31日

前年度繰越金 ￥ 579,859

今年度収入額 ￥ 573,784

今年度支出額 ￥ 621,834

次年度繰越金 ￥ 531,809

内訳 郵便貯金 530,000

現金 1,809

収入の部	支出の部	2009-11平均
① 今年度会費 ¥4,000×82名 ¥3,000×1名	331,000 ① 通信費 会報・案内・資料送付 事務局電話等活動費用 ② 印刷・コピー費 ③ 事務用消耗品費 ④ 日韓交流関係費 ⑤ ホームページ運用費 ⑥ 会議・会場費 ⑦ 協力者謝礼 ⑧ 交通費・下見費用 ⑨ 雑費・手数料	216,440 96,940 120,000 45,079 40,721 149,365 44,940 12,905 36,462 59,160 16,262 218,927 98,927 120,000 41,092 38,624 86,624 44,940 10,725 84,501 69,633 19,140
② その他の収入 8/5 光州訪問団 寄付残 2/9 15周年交流会 寄付残 夏・学生訪問団接遇預り金 会費納入時の寄付	242,623 63,623 77,000 100,000 2,000	12,905 149,365 44,940 12,905 36,462 59,160 16,262
③ 受取利息	161	10,725 84,501 69,633 19,140
計	573,784	621,834

※ 会費や寄付金等のお振込の際の郵便振替口座は、入金が有り次第、即現金化をしておりますので、この報告書では
全て現金勘定扱いとして記載し、郵便振替口座収支の報告は省略させていただきます。

2013年3月20日 上記の通り報告いたします。

監査の結果、正確であることを認めます。

会 計 伊藤みつ子
会計監査 大久保孝造

2013年度 日韓市民ネットワーク・なごや 組織表

顧問	名誉顧問	鄭 煥 麒	事務局	徐 彰 教	韓国での交流
	〃	横内 恭		武井 一	日韓交流史
	〃	伊藤 秋男		宮本 昌子	日本語指導
	代表顧問	石原 俊洋		加藤 勝	囲碁交流
	顧問	尹 大辰		伊藤 義郎	歴史・考古
	顧問	李 尚勲		土岐 良文	歴史・考古
全員事務局兼務	統括幹事	後藤 和晃	R	三尾 和廣	森で遊ぶ
	副統轄幹事	鈴木幸之助		土本美恵子	
	幹事(会計)	伊藤みつ子		田口 良浩	ハイキング
	幹事(涉外)	大嶋 明		長澤 進	日本古典音楽
	幹事(留学生)	須田奈保美		鈴木 健介	大学生・留学生
	幹事(高・大生)	久田 光政		石田 樹梨	
監査			世話焼	増田 一夫	松田 哲育
会計監査				佐藤 昭子	山田あき子
			G	山田 雅樹	山本 玲子

“日韓市民ネットワーク・なごや” 2013年度 年間行事予定

月	日	曜日	行 事	備 考
4	5 ~ 7	金 ~ 日	日韓交流史 金沢・能登“古代幻視”紀行	金沢学院大教授 小嶋 芳孝 氏
	11 ~ 12	木 ~ 金	“大邱農民の恩人” 水崎林太郎翁75回忌 ~ 韓国・大邱市寿城池 ~	事務局 後藤 和晃
	13 ~ 16	土 ~ 火	ソウル高麗大と光州YMC Aと会談 ~ 今後の受け入れ態勢関連	事務局 後藤 和晃
5	3 ~ 6	金 ~ 月	グループ“ハムケ” 日韓の高校生交流	グループ“ハムケ” 久田 光政 幹事
7 ・ 8	未定		韓国高麗大交流団 受け入れてのホームステイ等	事務局・会員・協力者
10	14	月	留学生サッカー大会 (支援)	事務局・会員
12	未定		第34回 韓日歴史・文化フォーラムで実施予定 知られざる百濟系大氏族・山田氏 ~ 日本古代史の真実に迫る ~ 講師 百済王氏研究家・三松みよ子氏	事務局・会員
2014年				
1	11	土	話してみよう韓国語第4回大会 於：名古屋国際センター	実行委員会に参加 事務局ほか
3	未定		第17回総会・日韓市民ネットワーク・なごや 総会及び懇親会 於：名古屋国際センター	国際センター研修室

この他に、会報の発行を予定しています。

3. 大邱市で水崎翁 75回忌の追慕祭 ~ 韓半島緊張下・肅々と ~

4月12日(金)、韓国大邱市で、戦前、農民のために大貯水池を造成し、大邱農民の恩人と慕われた水崎林太郎翁の75回忌の追慕祭が、寿城池の畔で開催されました。当日は青天の下、水崎翁の墓守を自認している徐彰教氏(81才)や元駐日大使の吳在熙氏、寿城区長の李晋勲氏などの他、駐釜山日本領事館の領事や当会の後藤事務局など、日本からの参加者も加え、およそ30人が集まり水崎翁の墓に祈りを捧げました。

今回の追慕祭は、水崎翁が昭和14年(1939年)に現地で死去してからの75回忌という節目に当ったため、当初は岐阜県に住む子孫の人たちが多数、参加する予定でした。ところが3月頃から北朝鮮が韓国や日本、米国等に「ミサイル攻撃も辞さない!」と言わんばかりの脅迫的な言動を繰り返したため、参加を取り止めざるを得ませんでした。ただ、そんな雰囲気の中での追慕祭に、初めて神戸市民2人が参加されたのは嬉しいかぎりでした。

落田義隆さんと福原宏幸さんのおふたりで、神戸市のシニアを対象にした教室で大邱について勉強するうち、



水崎翁 75回忌 追慕祭

水崎翁の故事を知り、日韓市民ネットの後藤事務局と連絡を取り合って追慕祭に参加されたのです。おふたりは、水崎翁の功績を神戸の人たちに伝える他、また機会があれば追慕祭にも出席したいと意欲的に話されていました。

4. 第32回韓日歴史・文化フォーラム

「李參平—日本の神になった朝鮮陶工」

豊臣秀吉によって行われた朝鮮侵略(壬辰・丁酉の倭乱)の際、朝鮮から多くの職人・陶工が日本に連れて来られた。現在、日本の磁器を代表する薩摩焼の沈当吉をはじめ上野焼・高取焼・萩焼は朝鮮から連れて来られた陶工達の手によって生まれました。

有田焼の生みの親と言われる陶工、李參平も朝鮮忠清道で生まれ、同様に肥後領主である鍋島直茂によって佐賀県に連れて来られた。その後、磁器生産に適した白磁石を求め、鍋島領内を転々として有田東部で天狗谷窯を開き、日本初の白磁器が作り出され有田焼が誕生した。窯を開いてから300年にあたる1917年には「陶祖李參平碑」が建立され、毎年5月には陶祖祭も行われている。



日 時：2013年5月29日[水]18:00 開演
会 場：愛知韓国人会館 5F 大ホール
〒453-0013
愛知県名古屋市中村区亀島1-6-2
地下鉄東山線亀島駅③番出口徒歩1分
会 費：500円
講 師：尹大辰(尹大辰) 氏
愛知淑徳大学講師

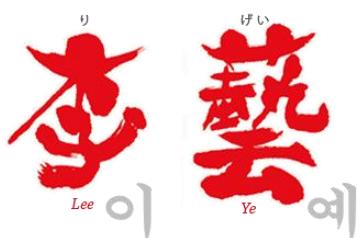


今回、当フォーラム実行委員の一人でもある尹大辰先生には、韓国と日本の交流に大きく貢献した「李參平」についてご講演いただきます。

【お申込・問合せ先】

韓日歴史・文化フォーラム事務局(民団愛知内)
金 栄一(キム・ヨンイル) TEL 052-452-6431
FAX 052-452-1716 E-mail: jigyo@mindan-aichi.org

5. 映画の紹介 歴史に生き続ける事実が今 この瞬間につながる 日韓関係を語る全ての人に



最初の朝鮮通信使

日本と韓国との、長い歴史に埋もれていた一人の外交官 李藝
今、600年の時を越えて、その息吹が伝わる

今から約600年前、朝鮮半島から命がけの航海で、43年間に40数回も来日した外交官がいた。名は李藝（りげい韓国語読みイ・イエ）。

地方の小役人だった李藝は、世宗（セジョン）大王の信頼厚い外交官となり、室町幕府・足利将軍に謁見するまで京都まで出向いた。しかし李藝には、8歳の頃母を倭寇に拉致されるという悲しい過去があった。少年の心に強く芽生えたであろう憎しみの情を、どのように友愛の情に変えて日朝の友好に人生をかけたのか…。

日韓関係の新たな時代に光を投じる渾身のドキュメンタリー！

韓国人俳優ユン・テヨンが、韓流ドラマやK-POPが席巻する今日の日本で、かすかに残された李藝の軌跡をたどり、釜山から京都までを旅する。驚くべきことに、今はさびれた瀬戸内の小さな港町には、朝鮮通信使をもてなした交流の歴史が、現在もなお大切に残されているのだった…。

同じ頃、駐日韓国大使館主催、朝鮮通信使の軌跡を辿るSNSリポーターの旅に参加した日本の大学生たちは、韓国で、知らなかった日韓の歴史に触れる。日本と韓国、たくさんの共通点もあれば、避けられない問題も…。新しい世代の若者たちは、どう乗り越えていくのだろうか…？

旅を通して見えてきたのは、いつの時代も変わらない、目の前の相手と心を通わせたいと願う人々の姿…。日本人と韓国人が共に前へ進むために、今だからこそ挑む、渾身のドキュメンタリー

日韓共同製作ドキュメンタリー映画 上映スケジュール（予定）

名古屋 名演小劇場 052-931-1701 公開日 6/1(土) 1日3～4回

ユン・テヨン、劇場舞台挨拶日程決定！！

6/2(日) 午前 大阪・シネ・リーブル梅田

午後 名古屋・名演小劇場（詳しいスケジュールは未定）

ユン・テヨン舞台挨拶付の上映回は、チケットが一律1,500円になります。

6. 金沢・能登“古代幻視”紀行 を実施 ~ 4月5日 - 4月7日 ~

日韓交流史講座の高句麗・渤海シリーズ等で学んだ古代の渡来人の軌跡として北陸の風土を旅してきました。参加者は、解説の金沢学院大学教授・小嶋芳孝先生や日比谷高校教諭の武井一先生を含め25名。以下旅行のスケジュールと参加者の感想文等を列記いたします。

2013	都 市	交 通	時 刻	主 要 旅 程	食 事
4/5 (金)	名古屋		7:15	JR名古屋新幹線改札前 時計塔 集合	朝(×)
		貸切バス	7:30	名古屋駅発～（東海北陸自動車道 経由）～野田山墓地（前田一族・尹奉吉）	
	金 沢			昼食～石川県埋蔵文化財センター（古代の金沢港関係）石川県庁展望室	昼(○)
				（古代の金沢港解説）ホテル着～夕食後、兼六園	
			18:00	夕食 浅野川畔 割烹・魚常（東の廊 見学）	夜(○)
宿泊：白島路ホテル 〒920-0937 石川県金沢市丸の内6?3 TEL 076-222-1212?					
4/6 (土)	金 沢		7:00	朝食	朝(ホテル)
	羽 咲	貸切バス	8:00	ホテル～羽咲市歴史民俗資料館～寺家遺跡～氣多神社（祭神 大己貴命）	
	剣 地			～福良港（高句麗・渤海の使節船の出発地）～昼食～剣地（砂鉄の浜）	昼(○)
	輪 島			～輪島（海士町公民館）～珠州・塩資料館～久麻加夫都阿良加志比古神社	
	能登島			～能登島・須曾蝦夷穴古墳	夜（旅館）
	七 尾		19:00	夕食 旅館にて	
	宿泊：のと楽 〒926-0178石川県七尾市石崎町香島 1-14 TEL 0767-62-3131				
4/7 (日)			7:00	朝食	朝(旅館)
	七 尾	貸切バス	8:30	ホテル～万行遺跡（古墳時代初頭・全国有数の巨大建物群）～国分寺跡	
	鹿 島			～院内勅使塚古墳（高度な加工技術を誇る石室）～鹿島郡・雨の宮古墳群	昼(○)
	千里浜			（多彩な様式の古墳群）～千里浜で昼食～（羽咲駅へ講師送り）～	
	名古屋		18:00	（東海北陸自動車道 経由）～名古屋駅着、解散	夜(×)

2013年4月5日から7日まで二泊三日の金沢・能登の旅に参加させていただいた。一日日は晴天に恵まれ桜の花も満開の金沢。何十年かぶりだったので、寺町台地奥にある野田山墓地へ市街地を通らず行けることに驚いた。前田家一族をはじめ多くの墓石があった中で西南戦争の戦没者のかな墓群もあり、明治の初めこの地からも九州まで兵として送られ、亡くなつた方が沢山いたことを知った。そういえば大津事件の津田三蔵も金沢から出征したらしい。石川県埋蔵文化財センターでは、小嶋先生の解説で畠田ナベタ遺跡などから出土した文字の色もあせていない墨書き土器や帶飾りなどを見学、その後県庁19階から今は埋め戻されている発掘現場を俯瞰、8~9世紀の渤海との重要な国際交易の窓口であった港湾施設の遺跡を想像した。夜は無料開放最終日の兼六園の夜桜見物、人出の多さと寒さで中途で引き返した。後藤さんが探されていた加藤清正が前田利家に贈ったという朝鮮の海石塔は、約半世紀前、兼六園が通学路だったので時折目にしていたもの、ただ由来を知らず場所をお教えできなかつたのだ。(一行のうち10人ほどが夜桜に映えて立つ海石塔に辿りついたそうだ。羨ましかつた！)

二日の最初は羽咋市の8~9世紀の祭祀遺跡である寺家遺跡。漸海との関連で朝廷の重要な神社となつたらしい氣多神社があったとされる場所だ。ここも埋め戻され道路や空き地となつていて、このあたり一帯が遺跡とのこと、鄙びた食堂の前の駐車場でバスの中から見学、先生にとって最も印象深い発掘現場の一つとお聞きした。渤海の使節船の出発地とされる福良港は、周囲の家々も旅館のような佇まいで古代の港の規模が推測できるような気がした。珠洲の揚げ浜式塩田は加賀藩の専売制の下で生産されていたところで、現在も夏場に製塩が行なわれている。予報通り3時頃から雨、急ぎ能登島の670年ごろにつくられた蝦夷穴古墳を見学、方墳で石室が二つあり天井などが高句麗式構造を備えているという珍しいものだった。



金沢・兼六園 海石塔

三日日は暴風雨の中、古墳時代前期の万行遺跡で全国有数の巨大倉庫群の柱の穴を見た。この遺跡は北方日本海世界の物資を、大和王権世界へ中継する位置を示唆しているそうだ。4世紀中ごろから造営され、眉丈山の山頂に点在している雨の宮古墳群へは天候が悪く、足場が危険で行けなかつた。

ところで能登といえば皆様はどのようなイメージをお持ちだっただろうか？日本海に突き出た長い海岸線と丘陵地で成り立ち、海産物の豊かな土地といったことなどであろうか。私は越中守大伴家持がいた高岡が郷里だが、近くの能登の古代について全く無知であつた。今回の旅で古代に渡來した人々の息吹を感じる古墳や神社を訪れ、ここは朝鮮半島との交流の表玄関で、渤海との往来の足跡など今日からは想像もできない国際的な交流が行われていたところでもあつたということを、出土品や古墳を通して知ることができた。フィールドでの見学の機会を得て、能登の奥深さの一端を垣間見た気がした。

→ 寺家遺跡 (写真提供 武井先生)



古代史だけでなく、近現代史についても知らないことが多すぎることを、改めて認識した旅だった。

野田山墓地で、尹奉吉の暗葬の地を前にして、10年ほど前、知人の案内で、太田道子さんといっしょに、ソウルの孝昌公園へ行った時のことを思い出していた。そこには三義士(李奉昌・尹奉吉・白貞基)の墓があった。李奉昌・尹奉吉は、やはり孝昌公園に墓が有る金丸の指示と計画のもと、暗殺計画を実行したという。

「一身を投げうつての尹奉吉の“義挙”に中国民衆と国民党政府は感嘆し、朝鮮の独立運動を積極的に支持するようになりました。全世界の人々も朝鮮の人々が日本の侵略にどれほど憤っているかを知るようにな



野田山墓地 尹奉吉義士の墓

大伴家持に出会えた能登紀行

家持は越中国司として七四六年七月～七五年八月まで「しなざかる越の国」に推定二十九歳から五年間を過ごします。それは七一八年に生まれ七八五年八月、六十八歳で多賀城にて没する生涯の中で一番颯爽としていた時だったのではないかと思われます。

とは言え都遠い辺境の越の国、そこに住むために

「 大君の 敷きます國は 都をも
ここも同じと 心には思ふものから 」

と、自らにいい聞かせるのではありますが、しかし望郷の念に駆けられていたことでしょう。

馬に跨り船に乗り、精力的に国司の職務を遂行します。そして四季折々には宴を開き歌を作り寿ぎます。家持も参拝した氣多神社近くの寺家遺跡から、一辺一センチほどの三角形のガラス片が出土したそうです。それは羽咋の砂中に埋もれたのは、家持が越中守であった八世紀半ばだそうです。

ペルシャ辺りで作られ、シルクロードをはるばる運ばれてきたガラス容器、日本海側の国々と交流があつた渤海使によってもたらされたのでしょうか。

りました。」と、日・中・韓 共同編集の『未来をひらく歴史—東アジア三国の近現代史』にも紹介されている。

孝昌公園の次に、知人がかつて勤務していたという古賀政男の母校にも案内してもらったことを、なつかしく思い出した。

古代の金沢・能登地方が大陸に向って開かれた地であり、人・物の交流が盛んに行なわれていたことを、遺跡や遺物を見るだけでなく、福良の港など現地に立って実感できた。

古代の日本の歴史も、東アジアの動きと深くかかわっていることを知ると、中学・高校などで習ってきた日本古代史って何だったのか?と思う。東アジアの歴史をもっと知りたいと思った。

古代能登の輝やかしい歴史と過疎化がすすむ現在の能登、「ここは大伽耶だったんです。」(3月末訪れた高靈で胸をはって説明して下さった 80 歳の老人のことば) というかつての高靈と、過疎化がすすむ現在の高靈、能登と高靈が、かつて製陶業で栄えたが、今は過疎化がすすみ小学校も廃校にされてしまう私の住む村と重なるのだ。

遺跡やそこに住む人々の生活を破棄して作られる新幹線、道路・・・。私たちの祖先たちがつくり守ってきたものを、次の世代にどう伝えていくのか、大きな課題を与えられた旅でもあった。

この旅を楽しく実り多いものにして下さった小嶋先生、後藤さんはじめ同行のみなさま方、本当にありがとうございました。

会員 小林孝子

お酒の盛られたガラス容器を手に、羽咋の海の音を聞きながら海の彼方の異国をしのぶ家持を、想像するのは幻想に過ぎるのでしょうか。

「 しなざかる 越に五年 住み住みて
立ち別れまく 憎しき宵かも 」

と、越中への惜別の辞を述べ、家持は七五年八月に少納言に選任され、帰京の徒につきます。情緒が満ちあふれました楽しい旅でした。

お忙しい中、ご案内くださいました小嶋先生をはじめ、皆様方に心から感謝申し上げます。



百千鳥

伊藤みつ子



高句麗・渤海 使節船の出発地 福良港

春蘭の寄り添ふて咲く奉吉碑
宴かな息止めいなだ踊り喰ひ
墨の文字残れる土器や春日差
渤海船帰る福良や百千鳥
春疾風師の眼鏡とぶ雨の宮

リーダーの歌声響く春の宴
能登の謎てふ講師の話暖かし
渤海てふ宿の名前や桜貝
夜桜に寄する人波兼六園
倒れたるままの間垣や春の浜



金沢・兼六園

春嵐

高橋孝子

巨大なる利家の墓松の芯
人溢る百万石の夜桜に
花の風飛鳥瓦の古窯跡
突堤の彼方はロシア燕啼く
方墳の雄穴雌穴や春嵐



能登島・須曾蝦夷穴古墳

今回の“幻視紀行”で納得した事、あるいは疑問を残した事で特に印象に残った事柄を幾つか述べておきます。

・古代朝鮮語、[さる]=[ssal]=米、の影響について

石川県埋蔵文化財センターでのことです。筆者は平安時代の「お触れ書き」である加賀郡榜示札を見て納得した事があります。この「お触れ書き」の冒頭に八個条の禁令が挙げられています。その第四条に「一五月三十日前可申田殖竟状」=「一つ、五月三十日前を以て、田殖(たうえ)の竟(おわる)を申すべきの状」とあります。ここで、五月は「さつき」と読まれたはずです。

筆者はこれを「さ -つき」に分解して理解します。「さ -」とは古代朝鮮語では米を表す語です。つまり五月(さつき)とは米の月つまり田植えの月なのです。百姓(ひやくせい)は田夫(でんぶ)に五月(さつき)中に田植えを終えるように指示していたことと思われます。古代朝鮮語の[さる]=[ssal]が何故(さ)になったのかと言うとそれは現代の韓国語でもそうですが、その語末の発音が英語の“L”的発音と同様に大和言葉になり難いからだと思います。つまり[さる]は口を大きく左右に開き[さる]あるいは[さう]と言うように発音される。(ハングルで表記できないので表現が曖昧なところはお許し願いたい。)それを大和言葉で表すと[さ]の1音になります。日本語の中に[さ]が米を表している言葉が幾つもあるのでそれを見て納得していただきたいと思います。

早乙女(さおとめ)	田植えをする若い女性
早苗(さなえ)	米つまり稻の苗。
酒(さけ)	米の気(スピリット)つまり米のアルコール。酒の事を「ささ」とも言う。
さ緑(さみどり)	若草や若葉の緑、とあるが語源は若い稻(早苗)の緑ではなかろうか。

こう考えると、五月(さつき)が米の月つまり田植えの月ということが抵抗無く腹へ落ちます。加賀郡榜示札が書かれた九世紀中頃まで当時の役人の頭の中にはこの思いがあったと考えます。

一枚の「お触れ書き」一条の禁令から筆者はこの考えを強くした。

・大己貴命について考える。…(おおあなむちのみこと)か(おおなむちのみこと)か?

“幻視紀行”の予習でその関連資料を読んで疑問に思う事がありました。この資料の(3)項の氣多太社の解説にある大己貴命(おおなむじのみこと)の事です。…氣多大社 由緒には大己貴命となっています。…岩波書店の日本古典文学大系「日本書紀」には神代上 第八段(一書の第二)にこうあります。



石川県埋蔵文化財センター展示室
「お触れ書き」複製品展示

『…奇稻田媛(くしなだひめ)を以て、…素戔鳴尊(すさのおのみこと)、妃としたまひて、生ませたまへる児の六世の孫、是を大己貴命(おおあなむちのみこと)と曰す。大己貴、此れをば於褒嫗娜武智(おほあなむち)と云ふ。』

またこの本の補注1 九十七には「大己貴神と出雲神話の歴史的背景」として解説がしてあります。それによるとこの神は古事記には大国主神・大穴牟遲神・葦原色許男・八千矛神・宇都志国玉神など五つの名前を持つとしています。筆者は、この中で大穴牟遲神の読みが日本書紀の読み、於褒嫗娜武智(おほあなむち)と一致していると思います。しかし解説では「おおあなむち」の名前の意味について述べず、「おおなむち」について述べています。そこでは『オホナムチのオホは大。ナは土地の意。ムチは貴人の意である。』としています。(岩波書店の日本古典文学大系「日本書紀」では本文のルビには「おおあなむち」を使い、解説には「おおなむち」を解説するという不可解な事をしています。)

筆者は大己貴というの古事記の大穴牟遲と併せて於褒嫗娜武智(おほあなむち)と読むのが妥当で、その意味は「大阿那の貴人」のことと考えます。言うまでもなく阿那(あな)は阿羅(あら)・安耶(あや)と同一で古代朝鮮の伽耶の中の一国です。

氣多大社の大己貴命(おおあなむちのみこと)を始めとして久麻加夫都阿良加志比古神社の阿良加志比古神(あらかしひこのかみ)・都奴加阿良期止神(つぬがあらしとのかみ)など能登半島には阿那(あな)や阿羅(あら)と繋がりを持つ神様が多い。さらに穴水(あなみず)なる地名があることからもこの觀を強くする次第です。

・渤海の幻影を見る。

筆者の渤海についての知識は少ない。そこで、上田雄・孫 栄健共著の「日本渤海交渉史」六興出版から、この国の歴史について興味のあるところを抄くってまとめておきます。その始まりは698年始祖、大祚榮(高王)が南満州の地に震(振)国、後の渤海国を建国しました。その様子は『・・高麗の旧居を復して、夫余の遺俗を有つ・・』とあります・つまり高句麗の再建を目指していたようです。日本と渤海との国交は727年(神亀四年)から930年(延長七年)まで約300年にわたって90回余りの渤海使及び遣渤海使の往還が行われた。この交流の中で筆者が注目したのは、第7回の渤海使がもたらした国書に書かれていたという『・・天孫高麗王大欽茂・・』という記事です。

ここまで読むと震国といい天孫といい、渤海という国が江上 波夫がその著書「騎馬民族国家」続編でいう辰王朝を意識していたに違いありません。古事記・日本書紀を読めば日本の皇室も天孫を自認していたことは明らかで、この点において日本と渤海は意識を共有していたと思われます。これが両国の交流が300年余りも(渤海の滅亡まで)続いた原因だらうと思います。

今回の紀行でこのことをうかがう事は難しかった、ただ小さな福良の港から外洋を望んだ時、筆者の頭の中を巡ったのは、多分騎馬民族である渤海人があの広い海を小さな船で渡ったのは何であったかという事です。文字通り「古代幻視紀行」となりました。



1号墳粘土椁の模型



・蝦夷穴古墳(7C後半)・院内勅使塚古墳(7C前半)・雨の宮古墳群(4C中頃~5C初め)]を巡る

筆者はつい半月ほど前に韓国の伽耶地方を旅してきたところです。不老洞古墳群・池山洞古墳群・玉田古墳群・大成洞古墳群・咸安博物館・金海博物館などを参観してきました。能登の古墳と伽耶の古墳を並行してみると伽耶の文化がかなり色濃く影響している事を感じます。土器に、武具に、馬具に、装身具などに深い関係があることがうかがえます。

今回の旅は正に標題にある“古代幻視紀行”となつたように思います。今一度、参考書を読み、年表を手繰って闇の中にかすんだ加賀、能登の歴史を、また東アジア・朝鮮との交流を明らかにしたいものです。

最後にこの紀行を企画・引率して下さった団長、副団長、会計さんにお礼申し上げます。また併せて難解な事や無茶な質問をする私たちを案内して下さった小嶋先生には深甚の感謝の念をささげます。



雨の宮古墳群・1号墳全景

(1号墳見学予定の頃、春嵐のため下記のような状況でした。写真は武井先生提供 蜜穂)



当会実施の現地見学は、東北アジア古代史に関心がある者にとって毎回ぜいたく三昧といった趣があります。今回も諸遺跡に関する行き届いた要点説明や関係論文が事前に配布され、渤海研究の第一人者である小嶋芳孝氏にご引率いただきて、氏の専門的説明に加えて郷土愛豊かなサービス精神のおかげで大変内容の濃いものとなりました。遺跡、親睦、美味な料理と書きたい事は山ほどあるのですが、紙面の関係上その一部を以下に書き連ねたいと思います。

まず、金沢港に到着した渤海使についてです。最初の使者は、渤海第二代目武芸王の国書を携えてきました。そこには、渤海が高句麗旧地を回復し扶余の風俗を保っている事と両王家が「本枝百系」の間柄つまり兄弟関係にある事が書かれています。つまり、渤海王と天皇家が高句麗・扶余族であるという事を述べているのです。神話学的には、「天孫降臨」という神話形態そのものが北方遊牧系文化であり、同時に渡来勢力が支配者となった事を告白しているわけですが、渤海使の国書はまさにその証拠となる文書といえます。今日、我が国の歴史教育においては、遣唐使ばかりが強調されて活発に行われた渤海や新羅への遣使が十分に語られていません。この点は見直しが必要だと思います。

次に、能登の鉄資源についてです。私は、弥生の渡来について従来の水田稻作史観によらず、優れて経済的な動機に基づく組織的なものと考えています。そして、その目的は鉄及び森林資源の獲得と各種交易にあつたと思います。この点で、能登半島の豊富な鉄資源に注目する必要があります。鉄が豊富な出雲に四隅突出弥生墳墓が集中し、能登地域にも展開したのは歴史的必然だといえます。海岸沿いの赤い岩と時代は下りますが付近の製鉄遺跡が大変印象的でした。私は、弥生時代も小規模の低温製鉄が各地で行われていたと考えています。

当初渡来の産鉄族が展開した地域には鬼伝説が豊富に存在しますが、奥能登猿鬼伝説も同様だと思いました。能登では猿田彦神をよく目にしましたから、この猿鬼達は地主神の代表である猿田彦（佐太神）族に違ひありません。なお、猿猴が河童（河伯）を意味する事から、猿は元をたどると黄河水神系部族、そして朱蒙の母系部族を示唆しているのかもしれません。また、出雲国風土記の国引神話によれば、北面から国引きされた佐太国は原出雲同盟四国の一つです。私は、国引きしたスサノオ長子で出雲直系の八島野尊が蘇我氏の原点と判断していますが、同氏は方形墳を採用しました。能登の方形墳墓文化の源流も出雲（佐太国）にあると思います。

続いて、気多神社です。神社の東側は、滝の無い「滝崎」地域です。気多神社の主な祭神が、出雲婿入りの大國主、日向系妻の多紀理姫、両神の子である事代主ですから、「滝」は「多紀」由来であると考えら

れます。「タキ」は「多氣」「多岐」「多芸」とも表記される古代名ですから、「氣多」は「多氣」の倒置表現だと思います。紙面の制約上詳説できませんが、大国主に大伽耶色、多紀理姫に多羅伽耶色が感じられます。多羅伽耶は安羅伽耶と同出自の弟族で卒本扶余出です。同族は積石塚文化なので、中世の物とされてはいますが氣多神社奥宮入らずの森にある積石塚の存在が気になる所です。余談になりますが、日向政権相続者である事代主と出雲直系の建御名方（諏訪神）との間で出雲政権の相続争いになりますが、この時、猿田彦が出雲側に立っていれば日向側にとっては猿「鬼」という存在になります。

そして、強烈な印象が残った加賀前田家の神道式墓地です。見事な三段構築の方墳が立ち並んでいました。菅原氏系図に菅原道真（天神社祭神）一原田忠貞→前田仲房→前田利家云々とあります。菅原氏は、埴輪創始譚で有名な土師宇庭を祖先とする生糸の出雲系ですから、前田家墳墓群は出雲の方形墳伝統をしっかりと引き継いでいるように思いました。

〈前田家の墓地〉



最後に、久麻加夫都阿良加志比古神社について。

この神社は「くまかぶと/あらかし/ひこ」と読まれ、地域の祭も「お熊甲」と呼ばれていますが、私は「くまか/ふつ/あらかし/ひこ」と読みます。理由は以下の通りです。

まず、「くま（熊）」は「高麗」の意味で高句麗を指すとよく言われています。また、神社には祭神を護る「狛」犬が置かれていますが、これは「狛犬（=北狄）」だと私は考えています。つまり熊=狛（コマ）=狛です。句麗族出身の解慕漱は「熊」心山で決起して北扶余を建てますが、句麗、扶余、北狄は狛族の一つです。また、瀬は虎族で狛は熊族です。総合的に考えれば熊=狛（扶余）族と考えるのが妥当であると思います。

次に、「か」は、三国志魏書扶余伝に「國有君王、中皆以六畜名官、有馬加、牛加、豬加、狗加」とあるように「加」は「部族」を表します。続いて、「ふつ」は、日本書紀神武東征譚の「布都御魂剣」や物部惣社石上神社祭神に「布都御魂」があり、出雲代表神スサノオが「布都斯御魂」であることから「布都」は同神の先祖にあたります。仮に北方色の濃いスサノオを朱蒙と考えると、「布都」は解慕漱が相当します。さらに、桓檀古記を信頼すれば紀元前3C頃扶余の中心地は卒本であったと考えられますが、符都誌によれば「符都」は北扶余の首都なので、「ふつ」=卒本と考えられます。そして「あらか」は音から「安羅族」で問題ないでしょう。「し」は助詞の「の」、「ひこ」は「王」です。

以上から、私の視点では「久麻加夫都阿良加志比古」とは「貊族卒本扶余出身安羅伽耶王」という意味合いになります。

従って、久麻加夫都阿良加志比古が意富加羅国王子都怒我阿羅斯等（別名：于斯岐阿利叱智干岐）であり天日矛であるなら、それらの神も安羅伽耶族となりますから、意富加羅はすなわち安羅伽耶になります。同族が、原出雲渡来神の賀茂族で、神武東征前における原大和政権の担い手であり、その出自を遡れば商（殷）族に行き着くと私は考えています。商の名宰相伊尹は大洪水から誕生しており、水神（河伯）との関係も伺えます。今日「伊」姓が突出して分布する濃尾平野の古代は、能登同様に「アラ」（荒神）族が一大展開した形跡があります。「古代能登と尾張には濃厚な関係がある。」と語る小嶋氏の微笑が脳裏に浮かんできます。



久麻加夫都阿良加志比古神社



お祭り資料館

す。卒本扶余族の本質が、鍛冶色を伴う犬(狹)族であれば、「狗」邪韓国、「狗」奴国とも深い縁があるといえましょう。

文末になりましたが、車中で始終ご歓談いただいた鄭氏、貴重な資料をご提供いただいた成田氏、食事や遺跡見学の際にヨチヨチ歩きの文筆活動に心暖かいメールを送っていただいた皆様方に心から感謝しつつ筆を置きたいと思います。働き詰めの「蟻の一生」を脱して、文筆家「ありのいっせい」になれるよう精進します。また出雲見学で皆さんにお会いできる事を楽しみにしています。

和倉温泉「のと樂」での宴会風景





ドイツ・フライブルグ大学での留学を終えて 会員 鈴木健介

2012年10月からドイツ・フライブルグ大学に半年間の交換留学に行ってきました。フライブルグは、ドイツ南西部に位置する人口20万の都市です。創立1475年のフライブルグ大学は、哲学者のマルティン・ハイデガーや社会学者のマックス・ヴェーバーが教鞭を執ったことでも知られる歴史ある大学です。また、グリム童話・赤ずきんちゃんに出てくる森のモデルとして知られる「黒い森」はフライブルグを囲む森林地帯であり、自然豊かな環境に立地しています。そんなフライブルグは環境先進都市としても知られており、街の電力のほぼ100%が再生可能エネルギーで発電されているほか、市街地への一般車両の乗り入れは禁止されるなど、環境保護の取り組みを先進的に行ってきた地域でもあります。

本稿では、留学の体験に関して、2つの観点から述べたいと思います。1点目はヨーロッパにおける脱国民国家の取り組み、2点目は外国人として暮らすことです。

私が滞在していたフライブルグは、ドイツ・スイス・フランスの国境地帯「オーバーライン」に立地しています。オーバーラインでは、経済分野だけでなく、政治・文化・教育・環境問題等の様々な分野で国境を越えた地域連携を進めようという試みがなされてきました。実際、人々は買い物や通勤のために日々国境を越えており、ヨーロッパにおける市場統合の現状を目の当たりにすることができます。オーバーライン地域のフランス側はアルフォンス・

こちらでは会員の皆様の声を載せております。皆様から、「会員のみんなに伝えたい!」「韓国のことが好き!」は勿論、「こんな旅行して来た」等、日々の暮らしの様子などの皆さんのが声を是非、お送り下さい。



トーデの小説『最後の授業』で知られるアルザス地方です。アルザスを巡る独仏の歴史については割愛しますが、第二次大戦中の独仏関係も踏まえれば、デリケートな歴史的背景を持つ地域において、活発な地域連携が進められていることは注目に値します。

こうした国境を越えた連携・協力が進む背景には、ヨーロッパ市民が国家・国境をどう認識しているかが重要な要素になっていると考えています。ある世論調査によれば、自分のアイデンティティが「ある国の国民（例えばドイツ人）」である以前に「ヨーロッパ人」であると回答する人が多数派になっていると聞きます。実際に、ドイツ人の友人と話しても、彼らにとってのフランスは、「外国」というより「隣の町」に近い感覚であり、国境を越えることは何ら特別なことではないことが分かります。

周知の通りヨーロッパ統合には多くの課題が残っています。ただし、従来の国家という枠組みを超えた新たな価値観を創っていくという取り組みから、我々アジアが学ぶべきことも実に多くあるように思います。アジアとヨーロッパが比較対象になり得ない要因を挙げるのではなく、ヨーロッパ統合の精神を学ぶことが重要なのだと思います。日本国内にいても、ヨーロッパ統合について学ぶ機会は多くあります。しかし、フライブルグというヨーロッパの国境地帯に身を置いて勉強し、生活したからこそ、より実感を伴いながら学び、感じることができたのだと思います。



次に、外国人として暮らすことという観点から述べたいと思います。ドイツは戦後、多くの移民を受け入れてきた国のです。従って、アジア人を含む「異人種」が街の中にいることは特別な光景ではありません。ただし、それは「ドイツ人」と「外国人」が全く同じような立場で生活できる環境であることは意味していません。断っておくと、基本的にドイツ人は我々に対して受容的であり、多くの場面で温かく支えてくれました。しかし、やはりマイノリティとして生活する中には、様々な困難があったことも事実です。言語的な問題もあれば、言葉による差別はなくとも何となくその場に居づらい雰囲気を感じることはありました。自分の立場を認識しながら身の振り方を考え行動する、ということをはつきりと意識したのは、はじめてだったように思います。試行錯誤を繰り返しながら、「外国人」として生活していくことに少しづつ慣れていきました。

この経験は私にとって非常に意義のあることだったと認識しています。一つには、(たとえ小さなことであっても) ドイツ人の友人から助けてもらった時、街の中で「同じ市民」として向き合ってもらえた時に、至上の喜びを感じることができたからです。そして、感謝の気持ちを持つことの大切さを改めて学ぶことができました。そして、もう一つには、日本に暮らすマイノリティの立場を擬似的に体験することができたからです。留学生と付き合うことが多い私は、彼らの気持ちや立場を理解している「つもり」になっていましたが、それが奢った考えだったことを痛感しました。言語や文化の違いによる物的

な障壁だけでなく、異国之地での生活という精神的な不安感や、孤独感は、実際に自分が体験しなければ分からぬことだということを学びました。

4年間を日本の大学で学ぶ留学生や、何十年もの外国での滞在を経験した方に比べれば、半年間の留学で学べることは微々たるものかもしれません。しかし、半年間で学んだことも多くあり、今回の経験が次のステップ、新たな自分の課題や、将来の夢に繋がったという意味では、たいへん大きな成果があったと思っています。ドイツ留学を経て学んだことは、日韓市民ネットの活動の中で、より発展させていきたいと思っています。留学前からご支援をいただきました会員の皆様方には、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

2012 (平成 24) 年度 名古屋大学 総長顕彰 「学修への取り組み」部門受賞

学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて「名古屋大学学術顕彰」の目指す人物像を実践している学生を顕彰する名古屋大学総長顕彰において「学修の取り組み」部門に推薦され、平成 24 年度名古屋大学総長顕彰を受賞いたしました。講評では、学修の取り組みに加えて、国際交流・市民活動の実績が評価されました。日頃よりあたたかくご支援くださっている日韓市民ネットワークの皆様に心より感謝の気持ちを表すると共に、引き続きご指導・ご鞭撻賜りますことをお願い申し上げ、受賞の報告とさせていただきます。



2月25日、朴槿恵氏が大統領に就任した。その関連行事として「希望の新世代を開く在日同胞の集い」がソウル市内のホテルで行なわれ、コリアンワールドの記者として取材する機会に恵まれた。市庁周辺と乙支路には太極旗が掲げられ、地下の食堂では就任式の中継を店のあゆみ（おばさん）が見入っている。会場には日本の国会議員も駆けつけていた。やはり、韓国にいる全ての人にとって特別な日となったのだ。



取材が終わったあとは、友達と合流した。この日の夕方は、2年前にホームステイしに来てくれた金慈中君とソウルで、翌日は天安で日本語教師をしていたときの教え子だった李慶鎮さんとそのご主人・丁鐘國さんに公州で、それぞれ会ってご飯を食べながら楽しく会話をすることができた。また、機内を含め韓国では普通に韓国語で話すことができた。それも自然に。帰りの飛行機に乗るときは、後ろ髪を引かれる思いだった。やはり、韓国は僕にとって第2の故郷だったのだ。次は、いつ帰れるだろうか。こうして「逆ホームシック」という病が再発するのだった。

※ ホームページやっています。

是非ご覧下さい。

<コリアンワールド（記者の目）>

<http://koreanworld-jp.com>

<ブログ「山田雅樹のひとりごと」>

<http://ameblo.jp/ktx063>

＜編集後記＞

余暇を図書館で過ごすことも有る日々、何気なく歴史書コーナーを見つめていたら、私にとって ぴったりのシリーズに出会えました。早速 1巻を読んだところ、面白くって、解りやすくって・・・。受験勉強の必要がなかった、とはいえ 自国の歴史に疎すぎるのは恥かしく、このままで人生も終えられない と思っていた矢先のこと。この 1巻には先日の金沢紀行で在野氏から教授して頂いた神祭りの様子等も詳しく描かれており、まさにグット・タイミング、彼の解説は本当だった、と苦笑しています。漫画界の巨匠 石ノ森章太郎（著）マンガ 日本の歴史 〈1〉 秦・漢帝国と稻作を始める倭人（中公文庫）全 55巻を読破出来る日が楽しみです。 蜜穂

